

3 里地里山管理や利用の実践的手法の拡大

①科学的・実証的な視点からの管理・利用手法開発の例

京都：里山整備後のモニタリング調査

綾部地区では、植生タイプの異なる2つの区域において植生変化のモニタリング調査を実施した。ひとつは旧小学校（現在はNPO法人里山ねっと・あやべの活動拠点）の裏山にある南西向き斜面のコナラ林であり、近年は都市住民らによる森林ボランティアにより散策道等が整備されている里山である。もうひとつは、この地域のシンボリック的存在である「空山」の山麓に位置するシラカシ林である。両者の距離は1km程度、どちらもこの地域の典型的な里山の植生と考えられる。



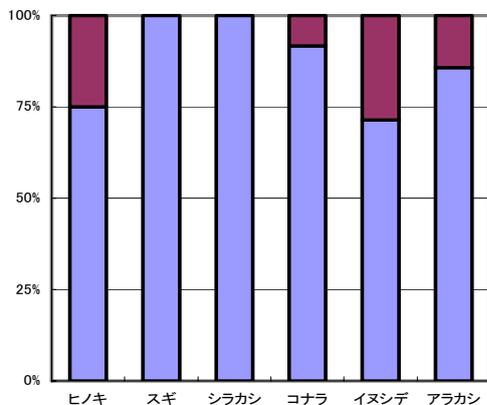
コナラ林



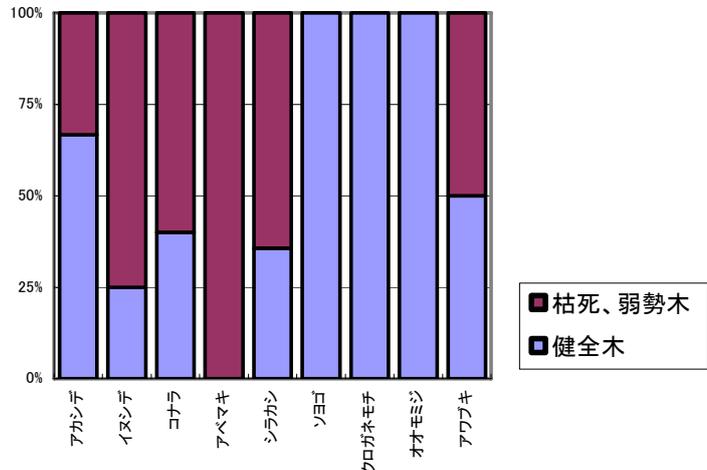
シラカシ林

2年間のモニタリングでは、コナラ林では大きな変化がみられなかった一方、シラカシ林ではカシノガキクイムシと思われる食害が拡大していた。特にアベマキはほぼ全て枯死あるいは枯死寸前、コナラも50%以上の幹が枯死か枯死寸前であった。また、樹幹サイズごとにみると、胸高直径10cm以下では食害の影響は見られなかったが、10cm以上では半数以上の幹になんらかの影響が出はじめ、30cm以上についてはほとんどの樹幹が枯死か枯死寸前であった。

近年ナラ枯れが問題になっているミズナラやコナラだけでなく、アベマキや常緑樹のシラカシについても被害が拡大していることが考えられ、本地区では今後も管理作業と調査を継続する必要がある。



コナラ林



シラカシ林